

## 中世狂言史年表

著者	橋本 朝生
雑誌名	能楽研究 : 能楽研究所紀要
巻	10
ページ	109-141
発行年	1985-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00020353">http://hdl.handle.net/10114/00020353</a>

# 中世狂言史年表

橋本朝生

## 凡例的なことも

○本稿は、中世の日記・記録・伝書などに現われる狂言や狂言師の資料を集め、年表化を試みたものである。

○先に私は「最近の能楽研究をめぐって——『文学』一九八三年七月号を中心に——」〔『芸能史研究』84〕で、「中世能楽史年表」の必要を説いたが、今や補訂を要するとは言え能については既にそうした類のものがあるのに対して、狂言についてはこれまで全くなかった。不充分は承知の上で、あえてまとめてみたゆえんである。

○上限は現行の如き狂言を指すことが明らかなものよりとし、狂言の前身らしき芸能は採らなかった。ただしそれ以後は、狂言らしきものを含めて、広く採録するように努めた。下限を慶長七年（一六〇二）としたのは、政治史の区分に従ったのだが、

その頃より上演記録の類が急増するためでもある。それ以後は別の整理の仕方が必要としよう。

○一部の伝書・上演記録の類を除いては、すべて既刊の本・論文に拠り、傍注等もそのまま引いたが、旧字体は新字体に改めた。また振仮名を略し、句読を改めたところが若干ある。

○伝書の類は、年時の明確なものはその年時に配し、それ以外はその書の成立年時に置いた。

○資料によって記載が相違する場合は、「参考」として別に掲げるか、（ ）に括って補った。

○収集にあたっては多くの方々の御教示を得、ことに『四座役者目録』研究会」における竹田裕子氏の発表資料、小高恭氏による一連の芸能索引等を参照させて頂いた。感謝申し上げる。

## 採録資料・引用依拠資料（掲載順）

- 迎陽記 大日本史料  
 看聞御記 続群書類従  
 習道書 日本思想大系『世阿弥 禅竹』  
 満濟准后日記 続群書類従  
 申楽談儀 日本思想大系『世阿弥 禅竹』  
 文安田楽能記 日本庶民文化史料集成  
 応仁略記 群書類従  
 経覚私要鈔 史料纂集  
 蔭涼軒日録 続史料大成  
 糺河原勸進猿楽日記 日本庶民文化史料集成  
 異本糺河原勸進猿楽日記 日本庶民文化史料集成  
 後法興院記 続史料大成  
 大乘院寺社雑事記 続史料大成  
 実隆公記 続群書類従完成会版  
 お湯殿の上の日記 続群書類従  
 第八祖御物語空善聞書 日本思想大系『蓮如 一向一揆』  
 実悟記 蓮如上人行実  
 竹馬狂吟集 天理図書館善本叢書『古俳諧集』  
 兼載独吟百韻 伊地知鉄男「和歌・連歌・俳諧——宗祇・
- 閑吟集  
 宗五大草紙  
 反故裏の書  
 四座之役者目録  
 証如上人日記  
 守武千句草案  
 大館常興日記  
 多聞院日記  
 言繼卿記  
 私心記  
 三好亭御成記  
 石橋勸進能之記異本  
 野坂文書  
 房顕記  
 観世又三郎宛似我与左衛門国広太鼓秘伝書 田安德川家蔵  
 永禄十三年卯月朔日於殿中御一献御能次第 尊経閣文庫蔵  
 玉里家久君上京日記 鹿兒島県史料拾遺  
 兼載の俳諧百韻その他を紹介して俳諧連歌抄の成立に及ぶ——『書陵部紀要』3）  
 日本古典文学大系『中世近世歌謡集』  
 群書類従  
 金春古伝書集成  
 能楽史料『校本四座役者目録』  
 石山本願寺日記  
 天理図書館善本叢書『古俳諧集』  
 続史料大成  
 続史料大成  
 国書刊行会版・続群書類従完成会版  
 石山本願寺日記  
 続群書類従  
 能楽史料『校本四座役者目録』  
 米倉利昭「厳島神社演能記録」（『能楽思潮』10）  
 福田直記編『棚守房顕覚書付解説』

- |                   |                      |   |  |
|-------------------|----------------------|---|--|
| 言経卿記              | 大日本古記録               | 駒井日記  | 改定史籍集覧   |
| 天正狂言本             | 古川久編『狂言古本二種』         | 文禄年間御能組   | 般若窟文庫蔵   |
| 上山城久世郡寺田庄法堅法度万ノ書物 | 日本庶民文化史料集成           | 薪能番組  | 日本庶民文化史料集成   |
| 宇野主水日記            | 石山本願寺日記              | 春日若宮祭礼後日能番組   | 玉井家蔵   |
| 上井覚兼日記            | 大日本古記録               | 天正慶長元和御能組   | 観世宗家蔵  |
| 続常陸遺文             | 大日本史料                | 鹿苑日録  | 続群書類従完成会版  |
| 時慶卿記              | 木村三四吾『業餘稿叢』          | 一噌流笛秘伝書   | 三宅晶子「早稲田大学演劇博物館蔵『一噌流笛秘伝書』——解題と翻刻——」〔早稲田大学大学院『文学研究科紀要』別冊10〕 |
| 天正記(輝元公上洛記)       | 戦国史料叢書『毛利史料集』        | 矢野一字聞書  | 竹本幹夫・三宅晶子「一噌流笛秘伝書」矢野一字聞書」〔中世文学資料と論考〕                       |
| 蓮成院記録             | 続史料大成『多聞院日記』         | 古之御能組   | 宮城県図書館伊達文庫蔵  |
| 音曲雑説聞書            | 堀部正三「初期囃子方に関する二三の資料」 | 慶長日記  | 本願寺史料集成  |
|                   | 〔中世日本文学の書誌学的研究〕      | ※上演記録の類については、表章氏「北七大夫長能の演能記録集成」(本誌8)の「資料解題」を参照されたい。 |  |
| 毛利亭御成記            | 続群書類従                |   |  |
| 毛利秀元記             | 国史叢書                 |   |  |
| 古今聴観              | 史料纂集『三藐院記』           |   |  |
| 八帖花伝書             | 日本思想大系『古代中世芸術論』      |   |  |
| 明暦堺七堂狂言芝居         | 日本庶民文化史料集成           |   |  |
| 雲上散楽会宴            | 鴻山文庫蔵                |   |  |
| 富岡文書              | 森末義彰「能の保護者」〔中世芸能史論考〕 |   |  |
| 文禄慶長御能組           | 観世宗家蔵                |   |  |
| 禁中猿楽御覧記           | 史料纂集『三藐院記』           |   |  |

応永六年（一三九九）

五月二十五日 今日勸進猿楽、御棧敷管領奉行云々、青蓮院、聖護院等同御見物云々、御大飲、狂言、猿楽数反尽能了、

（畠山基国）

（迎陽記）

応永三十一年（一四二四）

三月十一日 猿楽如昨日。畠山小弼為見物来。猿楽有児。件児小弼最愛云々。猿楽了小弼児同道帰。於松原有酒盛云々。三木張行也。抑猿楽狂言公家人疲勞事種々令狂言云々。此事不可然之間。田向以禅啓召楽頭突鼻了。当所皇居也。公家居住之在所ニ公家疲勞事種々狂言不存故実之条、尾籠之至也。為向後突鼻了。且有傍例。於山門。猿楽猿事令狂言。仍山法師猿楽令刃傷云々。又於仁和寺猿楽狂言聖道法師比興之事共令狂言。自御室被罪科云々。如此皆就在所有斟酌。不存故実之条奇恠也。可召放楽頭之由勘發了。仍楽頭更不存知之由種々陳謝申。比興也。

（看聞御記）

永享二年（一四三〇）

三月 一、狂言の役人の事。是又、をかしの手立、あるひはざしきしく、又は、昔物語などの一興ある事を本木に取りなして事をする、如レ此。又、信の能の道やりをなす事、笑はせんと思ふ宛てがひは、まづあるべからず。たゞ、その理を弁じて、嚴重

の道理を一座に云聞かするを以て道とす。

抑、をかし者、かならず数人の笑ひどめく事、職なる風体なるべし。笑みの内に楽しみを含むと云。是は面白く嬉しき感心也。この心に和合して、見所人の笑みをなし、一興を催さば、面白く、幽玄の上類のをかしなるべし。これ、をかしの上手と云り。昔の槌太夫が狂言、此位風なりし也。

それに付ても、数人哀憐のしほを持ちたらん生得は、芸人の冥加なるべし。言葉・風体にも、職なる事をなさずして、貴所・上方様の御耳に近からん利口・狂談をたしなむべし。返々、をかしなればとて、さのみに卑しき言葉・風体、ゆめ／＼あるべからず。心得べし。

一、申楽の番数の事。昔は四五番には過ぎず。今も、神事・勸進等には、信の能の申楽三番、狂言二番、已上五番也。近年、貴所様にて仕事は、ことの外に番数を尽くして、七八番・十番など貴命にて仕る事、私ならず。

（習道書）

四月二十三日 今日為申楽御見物。室町殿御入寺。午初刻也。：

…申楽十一番仕之。…観世三郎於召。五重并五千疋賜之了。自宝池院二千疋。面々寄合三千疋。以上万疋賜之了。児兩人。観世四郎。三人各二重太刀一腰給之。牛太郎狂言二人各一重賜之。

（満濟准后日記）

十一月十一日 先祖観阿。……其比の脇は、十二三郎、助九郎。

十二六郎は、若くて、下にて付けし也。狂言は、大槌也。……

三番猿楽、ヲカシニハスマジキコトナリ。近年人ヲ笑ハスル、アルマジキコト也、……

たゞ、脇の為手も、狂言も、能の本のまゝ、何事をも言ふべし。文盲にして、輪説まじる故に悪し。……

又、狂言には、大槌、新座の菊、上果に入し物也、菊初若の能に、此能は、子を勘当しけるが、親の合戦すと聞て、由比の浜にて合戦して、重手負ひたる能也。「あの囚人はいかなる者ぞ」と言はれて、「恐ろしく候」と云、寄りて見れば初若也。それよりしめり返りて、親に此由を告げしを、思ひ入、其比褒美有し也。狂言も、かやうの所を心得べし。

後の槌太夫は、鹿苑院御覧し出されたる者也。狂言すべきものは、常住にそれに成べし。きとして、俄に狂言になれば、思ひ做し大事成べし。後の槌、北山にて、公方人、高橋にて行合たるに、「槌なり」とて、扇かざして通られしを、側へ寄りて、そと見て、又扇かざしてわれも通りし。かやう成心根、上手の心也。……

マタ、狂言ニハ、ヨシヒトウエト云、アサシ也ト也、京エ連レテ上ラズ。「槌ガウツベキホドニ同道ナキカ」ナド、京知ラ

ヌ者ハカケル也。サレバ、カツテミヤウタイコニテ、ツキニヨクモナシ。傍輩ヲ笑ハセシ、者也。カヤウナルコトニテ、京・中ノ変リ目ヲ存知セバ、又コノ一段、大切ナルベシ。与二郎、ヨツ、長アリシ者也。ロ阿ハ上手ニセシ為手也。(申楽談儀)

永享三年(一四三一)

二月二十一日 室町殿御入寺已終。……渡御以後申楽始之。脇能時分ヨリ降雨。狂言間(ニ)又雨脚止了。仍舞台ヲ拭テ一番又仕之。(満濟准后日記)

永享四年(一四三二)

三月十四日 雨降。椎野殿入来。猿楽為御見物也。……天氣欲晴之間猿楽参。見物雜人群集猿楽一番了。狂言之後又雨下。違乱無極。(看聞御記)

十月十日 鳥羽ニ女猿楽勸進。自昨日始云々。隆富朝臣。重賢以下見物ニ行。帰参語。美女五七人歌舞殊勝言語道断見物也云々。拍子咲ウツクシなとハ男也。(看聞御記)

永享五年(一四三三)

四月十八日 未初出仕申楽始之。……今日芸能五番也。狂言二人。弥六。牛太郎三人。各五百疋賜之了。当年始也。(満濟准后日記)

永享七年(一四三五)

四月十九日 賀茂祭也。……内祭之儀有一献。……新参尼公狂物

之間一獻張行。音楽及乱舞。尼公音曲不可説也。(看聞御記)

文安三年(一四四六)

三月十七日 田楽之惣人数注レ之……松阿狂言……一阿狂言……徳

阿狂言

(文安田楽能記)

三月十八日 庭之能以後、於<sub>ニ</sub>会所<sub>ニ</sub>舞音曲御見聞。福若丸ハ御座之砌<sub>ニ</sub>候す。自余ハ在<sub>ニ</sub>広庇<sub>ニ</sub>装束をハ着して、居ながら詞をいひかはして、表<sub>ニ</sub>能之形<sub>ニ</sub>此風情<sub>〔亦〕</sub>有<sub>ニ</sub>其興<sub>ニ</sub>狂言相<sub>ニ</sub>交之<sub>ニ</sub>両三番、松阿勤<sub>レ</sub>之。

(文安田楽能記)

康正三年(長禄元年 一四五七)

三月十六日 殊に翌年三月、<sup>東西</sup>両亭押並べて御成。同十六日は大夫入道東の亭御気色思程の時宜也。觀世。今春。當時代の御猿楽。

昔を残す日吉猿楽。石童大夫が笛物狂ひ。乙松以来代々名を得し蟹か狂言。御簾の際に召れつゝ。御酒器を下され思し出たりし事共も。只一睡の夢の昔。名のみ残りて跡ぞなき。

(応仁略記)

長禄二年(一四五八)

十一月二十九日 総事付遣使帰来云、昨日後日能時、田楽狂言ニ面ヲ宛之間、猿楽共令遺恨、田楽宿へ押寄了、於其事者猿楽道理歟之間、田楽等罷出懇望之間、無為落居了、其刻中御門地下人等聞物忿之声罷出、矢共射懸之間、猿楽少々負手云々、

寛正五年(一四六四)

(經覚私要鈔)

一月十八日 蔭涼御成。院主出迎。……先十四日松拍。陰雨乍晴。

御快哉之由。御雜談刻移也。猿楽十二。以八十餘齡。尚強健之事。日吉座狂言。蝦蟹大夫勤<sub>ニ</sub>狂言二番之事。在<sub>ニ</sub>談余<sub>ニ</sub>也。

(蔭涼軒日録)

四月五日 御成アリテ則能始。以<sub>ニ</sub>觀世四郎<sub>ニ</sub>勢州貴殿江伺申。猿楽衆悉マキノ上下ヲ着也。

初日

相生。狂言、〔三〕ノ丸長者。八嶋。サルヒキ。三井寺。カクレミノ、兎。

かんだむ音。ハチタ、キ。源氏供養。懷中、兎。丹後物狂。八幡ノ前、兎。

鵜飼音。

已上七番

(糺河原勸進猿楽日記)

能組之次第付狂言

初日／相生／みるまの長者／八嶋／猿引／三井寺／かくれ笠／邯鄲／

はちたき／源氏供養／くわいちう／丹後物語／八幡のまへ／鵜飼

(異本糺河原勸進猿楽日記)

四月七日 二日めハ猿楽悉浅黄之上下也。……

鵜飼。狂、ヒゲカイタテ。あつもり。蚊、兎。山祖母音阿。大か小か、兎。

春近。鬼ノマメ。松風村雨音。イモシ。自然居士。キシヤク、兎。恋

のをもに音。

已上七番。

(糺河原勸進猿樂日記)

二日／鵜羽／鬚かいたて／敦盛／うさぎ／山姥…／大か小か／春近／  
鬼のまめ／松風／いものし／自然居士／ちやく／恋のおもに

(異本糺河原勸進猿樂日記)

四月十日 三日め…猿樂衆ヒヤウ紋二重物の上下也。

白樂天。狂、三本柱。せい願寺。コヨミ、兎。箱王曾我。アサイナ。  
実盛音。茶かぎザトウ。二人閑音。ハラツミ。四位少将。若メ。

碓音。入間川。放下僧音。馬太刀。みるむこ、兎。杜若。カラカサノシヤウク、  
兎。しきみが原音。ワラウチ。十番。養老音。御コイノウ。餅クイ。名

(乞能)

取ノ老女音。

(糺河原勸進猿樂日記)

三日／白樂天／三本柱／誓願寺／こよミ／箱王曾我／あさいな／二  
人静／はやかきざとう／四位少将／腹つゞミ／碓／なきこむ／しきみ  
天狗／いるま川／杜若／わかめ／放家僧／御乞能 二番／名取老女  
／養老滝

(異本糺河原勸進猿樂日記)

寛正七年(文正元年 一四六六)

二月二十三日 伝聞、今日於武家有女猿樂云々、四五日前於下辺  
八条有勸進猿樂、言語道断奇妙之間、今日武家被見物云々、女五  
六人、笛大鼓鼓以下皆男云々、狂言同男云々、彼等近日自越前  
上洛云々、太希代事也、

(後法興院記)

文明四年(一四七二)

四月二十九日 中院猿樂如常、…自早旦六時至夕部六時、芸能

二十五番并狂言二番、

(大乘院寺社雜事記)

文明八年(一四七六)

三月一日 今日小犬於禁裏有一声云々、仍雖有召不参、

(実隆公記)

三月六日 昼間小犬於庭上歌舞有興、玉階之花催興金殿之風勸醉  
者也、

(実隆)

十月四日 今日北小路三位禅尼一献申沙汰也、仍武家御参内、可  
祇候之由也、…伏見殿入夜御参、宝慶寺殿令参給、長直朝臣  
依召参上、狂言風流上下放顎笑、

(実隆)

文明九年(一四七七)

四月十七日 及晚有召則著束帶参内、御兆子進上之、有十度飲、  
新大納言、源大納言、予等祇候、長直朝臣狂言催逸興者也、

(実隆)

文明十年(一四七八)

一月二十日 今日又有召之間晩頭参内、又有大飲、盛富微声、□  
犬弥太郎狂言等有興、  
御所／＼とめまいらせられて。御こうてう御ひし／＼にて。お  
としたちもしこう。こいぬ御きやうけん御れいにまいりて。う

(実隆)



たはせらるゝ。

(お湯殿の上の日記)

十一月十六日 てんかく事新大すもし。大す。御いままいり申さた。ふしみ殿。つうけん寺殿御まいり。一日のよりもれきゝの事ともにて。大くら卿ちとりなとますうたるて、御ひしゝにてめてたし。

(お湯殿)

文明十一年(一四七九)

一月二十一日 今日□々衆□□汰也、仍献御兆子等、新大納□、

源大納言、兵部卿、滋野井、民部卿、大藏卿、右宰相中将、下官、言国、俊量等朝臣、以量、源富仲等祇候、於地下少々有微声狂言等、六献予候御酌、

(実隆)

文明十三年(一四八一)

三月十四日 こいぬさいおとこ。ことしはしめて御れるにのほるよし申。すやかにうたふよしみなく御申あり。御たちなからきかせおはしますに御さか月そとまいる。ふしみ殿よりこもしまいる。

(お湯殿)

文明十五年(一四八三)

七月七日 今日於室町殿、伊勢守宅有猿楽、可祇候之由昨日以御使被

仰下、……猿楽十三番、狂言□二番也、此間一番源四郎、今春禪竹孫也

葛城入破歌絶妙、諸人驚目者也、初夜之時分退出、(実隆)

八月五日 午後参内、……和漢一折之後、大藏卿依仰於庭上□□

歌舞之狂遊、諸人解頤而已、

(実隆)

九月十三日 和漢御会及夜、一献及数巡、自他歌舞有其興、大藏卿、海住山等舞曲、一品之歌曲等諸人解頤、天氣令入興御、珍重々々、

(実隆)

文明十六年(一四八四)

九月二日 兎大夫来。近日自能登歸洛。彼太守畠山左衛門佐殿。太有威勢之事談之。

(蔭涼軒)

九月二十八日 藤佐。蓮小。兎大夫。新三郎齋之。

(蔭涼軒)

文明十八年(一四八六)

十一月八日 晚来往瑞春軒有<sub>二</sub>小宴<sub>一</sub>。時兎大夫在<sub>レ</sub>座。

(蔭涼軒)

十一月九日 陽叔西堂兎大夫赴<sub>二</sub>番易<sub>一</sub>。

考番易恐播陽

(蔭涼軒)

十二月二十二日 瑞春軒有<sub>二</sub>齋会<sub>一</sub>。……有<sub>二</sub>小宴<sub>一</sub>。兎大夫自<sub>二</sub>播州<sub>一</sub>歸洛陪<sub>レ</sub>宴。談<sub>二</sub>播州陳中事<sub>一</sub>。

(蔭涼軒)

文明十九年(長享元年 一四八七)

一月二十八日 久昌軒有<sub>二</sub>齋会<sub>一</sub>。々々時分天快晴。樹。丹。本。惊。桂。藤。昌。藤若。虎法師。兎大夫。及愚著座。(蔭涼軒)

閏十一月十二日 早且遣<sub>二</sub>桂子小補<sub>一</sub>云。今日浦作来<sub>二</sub>当院<sub>一</sub>。齋<sub>レ</sub>之。

光伴為<sub>レ</sub>幸。小補云。諾々。浦作携<sub>二</sub>三繩<sub>一</sub>来。左辺。藤子。小補。

浦作。英保。左京亮。江見民部丞。山下与次郎。三島与次郎。

右辺。宣南榮。愚某。富田佐渡守。中村又三郎。藤田四郎次郎。

兔太夫。同三郎四郎。同新三郎。中酒之後三献有之。

(蔭涼軒)

長享二年(一四八八)

一月十八日 兔大夫来有小宴。以旧例送扇子杉原。(蔭涼軒)

六月二十四日 棟季材兔大夫来。有宴。雜話移刻。(蔭涼軒)

九月二十七日 兔大夫来。有宴。憑返以烟景。(蔭涼軒)

長享三年(延徳元年 一四八九)

一月六日 午後月閑藏主携東啓美杖来。於書院有宴。芳州

茂叔春湖招之。時兔大夫来尽狂能。不忍見之。与円相并一柄。東啓適意之色有之。及晚皆帰。(蔭涼軒)

一月十日 依虫氣行事懈怠。早旦兔大夫来。先也所約也。雲

沢祖忌半齋。々懈怠。兔。新三。孫四齋之。愚相伴。二汁七菜。齋了皆帰。(蔭涼軒)

一月十四日 半日有宴。笙歌鼎沸聞南隣。皆傾耳悵望。豈於野

人廬有如此趣乎。坐有兔大夫。高声驚四隣。(蔭涼軒)

一月十六日 及帰当院善月祈祷大般若。々々了齋会。一汁三菜。

中酒二遍。招兔大夫齋之。

(蔭涼軒)

二月四日 兔大夫来云。去二日於北御所。小者有能。見物仁參。

秀峯美丈。東啓美丈在座。秀峯誠鷄群之一鶴也云々。勸以盃。

兎話云。今日又於北御前有能。定彼美丈亦可有見物云々。

(蔭涼軒)

二月五日 早旦赴常喜軒煎点。……兔大夫踏扑占一円相。及帰

信上司兔大夫分齋。

(蔭涼軒)

二月七日 早旦赴妙嚴院煎点。……七香湯加般若湯二遍。二番座

了有宴。兔大夫来狂矣。占一円相。直往永徳院。小補。上方。

愚。東雲。誠叔。月嶺。梅雲往。齋之頃一覽月嶺之和詩。自

五岳相集。齋二汁七菜。七果。中二遍。兔尽狂能。又占一

相。

(蔭涼軒)

二月八日 齋前……又遣昌子於妙嚴永徳。伸昨日点心齋兔大夫

兩円相之謝。……齋罷。……於書院有宴。雜話尅移。時相国

住桃源来。茶話。兔大夫往方丈占一円相。(蔭涼軒)

二月十日 赴慈光軒齋。……齋三汁十四菜。湯二遍。七果。茶

了。賦詩。兔大夫在三座之外。……詩後有宴。秉乘衆天竺中署

加座。三献了各帰。兔狂舞占一円相。(蔭涼軒)

三月三日 所々状来。一々披見之。正月十六日自浦作陳所企

松拍赴大將之陳所。其返報二月十七日有之。書立上之。凡

拍物数七十色。能七番。狂言七番云々。(蔭涼軒)

三月十二日 兔大夫来。以茶十包贈之。等持寺在座。有小宴。

兔大夫狂言。(蔭涼軒)

四月二日 兔大夫来与宴。(蔭涼軒)

五月十五日 命雲沢本房之衆。常德院殿半齋有之。於三書院聊有齋會。兎大夫來云。今晨赴養花齋云々。  
(蔭涼軒)

六月七日 午後兎大夫來。勸以湯漬米汁。

(蔭涼軒)

六月八日 鼎材招春。樹。柏。桂。藤。康。兎及愚齋之。  
(蔭涼軒)

十月十二日 齋之案内石見宗繁僧。神山駿河入道方。上原對馬守。

同息喝食。高岡次郎左衛門尉。兎大夫及愚。三汁十三菜。般若

湯數遍。麵。又湯三返。七果。各帰。

(蔭涼軒)

十一月二十三日 午時兎來。有宴。時隆上司來。持以混元丹五

貝。二貝兎所望之。

(蔭涼軒)

十二月十五日 覺胤來……相語、今度金晴方下行事、五十貫座中、

十貫大夫、十貫脇守菊、三貫兒、二貫キウケンシ、  
(大乘院)

十二月十六日 如仰元日宴以下朝儀再興之御政共、……叙位など

おこなはれ候て、両大弁など故障も出現候て、入眼右筆などを

も、如形あたりつき候へかしなと存候こそ、なになさすこし様

のハしかりて食せんといひたる狂言ニ似たる事にておかしく候

へ、  
(実隆公記紙背・姉小路基綱書状)

十二月二十二日 及午後二張宴。兎大夫來陪席。三献了。乱座

秉燭遊。觀世新三郎亦來与宴。

(蔭涼軒)

延徳二年(一四九〇)

一月三十日 齋罷古沢弥三郎自播來。……勸弥三郎以盃。時兎

大夫來。同勸盃。画扇一柄。円杉原一束贈兎。嘉例也。  
(蔭涼軒)

三月八日 同朋衆後藤佐渡守齋之。……十二員。三汁十四菜。中

湯二遍。七果。茶了。於西縁立。調。囲碁者二番。立帰。碁

了。著座常松。兎大夫。新三郎來陪座。十五員。五献了。皆

醉帰。歌舞非恒。一時快也。

(蔭涼軒)

三月十日 兎大夫新三郎於丹寮齋之。二汁五菜。  
(蔭涼軒)

延徳三年(一四九一)

四月二十九日 赴武田宅齋。……徐翁來則張座。主位月江某。功

叔。邸主。少蕙。野間禪門。白井民部丞。寺井入道。兎大夫。

江州猿樂。賓位春英。春陽。景徐。誠叔。景甫。毛利僧。聖才。

武田小三郎。已上十七員。三献將終頃少人出在座頭。三献後

乱座歌舞鼓吹。人々尽能。

(蔭涼軒)

五月三日 兎大夫來齋之。嘉例扇子持之來。贈之<sup>考恐脱以字</sup>画扇

一柄。杉原十帖。蓋年々旧例也。当年初逢之。兎語云。先也於

武田宅自昼至夜尽力勤我芸。雖然天之輕衣之露程亦不

逢惠。興尽帰矣。月江美丈一日一夜不<sup>レ</sup>去其席。小便亦不<sup>レ</sup>為

之。況於余事乎。

(蔭涼軒)

六月七日 此日觀世狂言。春云者過去作辭世之和歌。寄善法寺。

其歌云。

アハレナリ六十チ三トセノホトツキテナキ人カスニケウソ入

ヌル

六十三歳也。可<sub>レ</sub>怜々々。

(蔭涼軒)

十二月二日 午後兎大夫来。勸<sub>二</sub>晩食。打話移<sub>レ</sub>刻。

(蔭涼軒)

十二月五日 午時城貞平家二句話<sub>レ</sub>之。二句了著座。招<sub>二</sub>上月又三

郎殿。主位悦公。桂公。神山。浦作。山城守。裳懸。大河原。

裳懸。馬場。文阿。坂東。賓位滝公。予。又三郎殿。城貞。藤

左。觀世大夫。四郎次郎。小次郎。三郎四郎。新兵衛。并二十

一人。二献了乱座。又陳外郎勝光陪<sub>レ</sub>座。大夫舞。……今日於<sub>レ</sub>

宴觀世大夫与三百疋。小次郎。四郎次郎。三郎四郎。新兵衛。

坂東。城貞。文阿。各与三百疋。以上九百疋。可<sub>レ</sub>歎也。(蔭涼軒)十二月十九日 自<sub>二</sub>兎大夫状到来云。綿泗洲所<sub>二</sub>望之。合三枚。為三泗洲<sub>二</sub>贈<sub>レ</sub>之。副以<sub>二</sub>返章<sub>一</sub>。

(蔭涼軒)

延徳四年(明応元年 一四九二)

一月二十三日 兎大夫持<sub>二</sub>扇子<sub>一</sub>来。勸<sub>二</sub>赤雲碧霞。三百扇。杉原遣レ之。打話移<sub>レ</sub>尅帰。

(蔭涼軒)

二月二十一日 くせまゐちこわかしゆよくまふよし。きやうけん

する物申。なかはしにてまわせらる。しきゐなく御らんせら

る。あふきたふ。をりかみもたふ。

(お湯殿)

三月二日 斎罷有<sub>レ</sub>宴。々中半来衆。浦上美作守。法師二人。高柳。

渋谷弥太郎。明石又次郎。藤木。蔭山八郎。首藤彦三郎。觀世

大夫。同弟小次郎。新兵衛。三郎四郎。又次郎。与三。金剛又次郎。自拍三人。及<sub>二</sub>半夜<sub>一</sub>帰。

(蔭涼軒)

三月四日 三郎五郎話云。去月廿八日左京兆浦作宅御出。御座敷

位。……次間右辺郎主浦上美作守。觀世大夫。左辺浦上松千代

丸。別所大藏少輔。富田土佐守。別所新九郎。上原对馬守。小

寺勘解由左衛門尉。後藤々左衛門尉。兎大夫。觀世小次郎。左

辺十四員。右辺五員。并十九員。

(蔭涼軒)

四月十八日 往<sub>二</sub>安富宅。浦作出迎。……左辺。……右辺予。登首

座。昇藏主。授藏王。上池子僧。古沢子僧。東福清上司。陳外

郎。金剛四郎次郎。新兵衛。孫四郎。斎了皆赴<sub>レ</sub>浴。……浴後有<sub>レ</sub>宴。文首座。三郎四郎相加。賢首座。文阿失<sub>レ</sub>之。宴数献了

皆醉帰。

(蔭涼軒)

五月十八日 兎大夫来。依<sub>レ</sub>不例<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>面<sub>レ</sub>之。

(蔭涼軒)

六月三日 兎大夫所<sub>二</sub>望斎。斎一汁五菜。中湯二返。五菓。茶了。打話移<sub>レ</sub>尅帰。

(蔭涼軒)

明応二年(一四九三)

一月四日 去二日赤松公被<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>于浦作旅館妙蓮寺。自<sub>二</sub>初夜頃<sub>一</sub>至三日之巳刻<sub>二</sub>宴了。見<sub>レ</sub>帰<sub>二</sub>本能寺。着座赤松公。同出羽守。

同息又次郎殿。……金剛大夫。金剛四郎次郎。兎大夫。新兵

衛。三郎四郎。弥七。并二十六員云。

(蔭涼軒)

一月十一日 兎大夫持<sup>ニ</sup>恒例之扇<sup>ニ</sup>来。対<sup>レ</sup>之勸以<sup>ニ</sup>盃。白雲。食籠等調<sup>レ</sup>之。贈<sup>レ</sup>之以<sup>ニ</sup>黄鶯。扇。杉原。年々嘉例也。(蔭涼軒)

閏四月二十日 兎大夫来。勸以<sup>ニ</sup>黄雲緑盃。打話移<sup>レ</sup>尅帰。(蔭涼軒)

閏四月二十一日 午時茂叔来。勸<sup>ニ</sup>一器。話云。世間有<sup>ニ</sup>化鳥。其頭馬而其尾蛇也。其蹄如<sup>レ</sup>牛。其鳴声云<sup>ニ</sup>無常引導骨積天<sup>ニ</sup>云々。予云。昨日兎大夫所<sup>レ</sup>話同前。在<sup>ニ</sup>大和越智在所<sup>ニ</sup>云々。其声ヲハ不<sup>レ</sup>謂也。(蔭涼軒)

十一月二十七日 兎大夫来、見参、<sup>(脱有カ)</sup>扇本与<sup>レ</sup>之、宝生大夫・三郎次郎父子三人参申、

(大乘院)

明<sup>レ</sup>成三年(一四九四)

二月十四日 兎大夫来、見参、綿一屯給之、畏入、昨日昆布・帳

子一進上之、京都細川屋形様・越中御所様大綱相語之、(大乘院)

六月 一貫二百六十目、九屯ハ一貫二百十八文目也

二百八十六文目<sup>(マ、)</sup>鳥、百四十三文目上、百四十三文目<sup>光</sup>、

合五百六十九文目所々召仕。卅目藤賀 百目兎大夫

(大乘院)

明<sup>レ</sup>成四年(一四九五)

二月十二日 薪猿樂大門四座在之、七今日無為珍重々々、兎大夫

扇一本持参申、綿一屯給之、畏入云々、(大乘院)

明<sup>レ</sup>成五年(一四九六)

二月十二日 兎大夫八日参申、今日綿一屯宿<sup>ニ</sup>送之、畏入之由申参、明日可上洛云々、(大乘院)

七月九日 今日親王御方以下被猷嘉例之御盃、可令参候之由伯二位相催之、仍未刻許参内、於黒戸有一猷、……地下歌美政、……九猷之後猶及猷盃、大藏卿経茂卿参上、永宣朝臣<sup>(声カ)</sup>下姿、等被召之、美声等緯及狂事、有興々々、月下退出、(実隆)

明<sup>レ</sup>成六年(一四九七)

十一月十日 今夜女中衆田楽事申沙汰、可祇候之由被仰之間、不

令退出、参仕人々、下官、按察、甘露寺中納言、<sup>追</sup>参、伯二位、

<sup>今夜申沙汰之衆也、</sup>新宰相中将、永宣朝臣、為親、大藏卿依召参仕、歌舞

狂々之体尤有興、不能尽筆端矣、(実隆)

十一月二十一日 今夜田楽事親王御方以下御沙汰也、仍及昏参内、

一猷如例、歌舞等有興、大藏卿舞解願了、(実隆)

明<sup>レ</sup>成七年(一四九八)

一月二十一日 なかはしへなしまいらせらるゝ。ひこ四郎きやう

けんさるかくさせらるゝ。(お湯殿)

一月二十六日 御かたの御所へなしまいらせらるゝ。……しらう

うたふ。兵衛督ともの物なとそひていりはあまたする。きやう

けんしほくしき物ありておもしろし。(お湯殿)

二月十一日 兎大夫扇一本・帳子持参申、色々時宜相語之、当年

於公方御能在之、一度ハ右馬守申沙汰、一度ハ公方、御前時宜以外作法、召出以下様一向背先規云々、  
(大乘院)

六月十三日 暁ニ、前住様ヨリ、コレノ小五郎ヲ御便ニテ、「猿樂ヲスルゾ、見ヨ」ト仰候間、「畏テ候」ヨシ、申候トコロニ、ソノ明クル日、堺衆、「能ヲシタキ」ト言ヒテ、大勢上リ候間、十五日ニハ北殿(実如)サセラレ候。十六日ニハ坊主サセ候。又ソノ能ニ鶯ノ鳥サシノ狂言ヲ色黒四郎二郎仕候。太刀刀ノ落ツルモ言ハズ、人の叱ルモ耳ニ入ラズ、鳥ヲサスニ念ノ入リタルヲ御覧ジテ、世間仮リノ事ニモ念力ヲ入レネバナラズ、サレバ仏法モアノゴトク念ヲ入レテコソト、面白ク思召シテ、明クル日ノ能ニモ召返シテ、鶯ノ狂言サセラレケリ。

(第八祖御物語空善聞書)

〔参考〕前住存如上人二十五年忌<sup>文明十三</sup>山科にて御沙汰ありけり。  
御仏事一七日結願の已後に四日申樂の能ありし時狂言に、さい鳥さし鳥をさゝんと心に入ねらふ所に、或物来り衣裳を乞ければ、鳥に心を入るまゝに、身に着したる衣裳もみなくぬぎてやり、腰ノ刀脇指もみなくやりたるも覺ず、鳥さし鳥をにがしたるあげくに、身のはだかなる事を思付て侍る。此狂言を二日めに仕りたるを、蓮如上人御感ありて、三日めに又させられけり。是を後にも被仰出、鳥をさゝんと心にかけて、何も不覺

不知は殊勝なり、と仰られ、加様に仏法に心を入れてこそは、仏には成べけれ、と被仰侍りし事也。  
(実悟記)

明応八年(一四九九)

二月十余日 花さかり御めんあれかし松の風

さくらになせやあめのうきくも

(竹馬狂吟集)

明応九年(一五〇〇)

七月十一日 御さか月まいる時分に六らう御かたの御所へまいる。御庭へめしてうたわさせらるゝ。かたひらたふ。やくし寺御れうちのまゝおかれてこれもうたふ。こやうにおもしろし。きやうけんのかすへもあり。

(お湯殿)

七月二十三日 きやうけんの御すへにそとつけられておとりはやし物する。おさあい物のうともする。

(お湯殿)

永正七年(一五一〇)

六月六日以前

ほころひかちにみゆるかみしも

主殿と狂言なからむしりあひ

いそひて鳥をくはんとそする

(兼載独吟百韻)

永正九年(一五一二)

一月二十七日 自室町殿美物兩種<sup>貝蛸、</sup>被下之、……仍晩頭著小直衣参入、御酒宴程也、則依召参入、雅業王候之、細川右馬頭以

下祇候、大館刑部大輔歌舞、又狂言物語等有興、傾数盃退出、時宜快然、祝著無極者也、  
(実隆)

永正十五年(一五一八)

八月 狂ひくく／＼とてなるこはひかで、あの人の殿ひく、いざ引く物をつたはんや、いざひく物をつたはん、……  
狂逢(ふ)夜は人の手枕、こぬ夜はおのが袖まくら、まくらあまりに床ひろし、よれ枕、こちよれ枕よ、まくらさへにうとむか。

(閑吟集)

大永八年(享禄元年 一五二八)

一月 慈照院殿御時。観世窮困之由聞召されて。大名衆に扶助有べき由被<sub>レ</sub>仰候時。畠山殿徳本にて能をさせられ候て。千貫被<sub>レ</sub>遣候。庭面の座敷に千貫つまれ候て。戸をたてゝをかれ。能はてゝ折紙をつかはされ。さて戸をあけられたる由うさき兎大夫物語致し候し。いらぬ事ながらしるし候。  
(宗五大草紙)

享禄二年(一五二九)

この頃以前 一、出仕のやう。……殊々、式三番の間、身を信にもつべし。能の間にも、人を見ず、じやうらくかゝず、能ほめず、狂言わらはず、物いはず、一大事と思ふべし。……  
一、西行桜の後、をしほの後、花おりといふ狂言をする事、花をおれば、其能の無<sub>レ</sub>曲やうにみゆる、無用と申人あり。是可<sub>レ</sub>

然申事也。べちに作物を出すべし。是、朝倉弾正だんじやう殿

天津余清の被<sub>レ</sub>仰し事也。金言也。  
(反古裏の書(二))

一、朝禅・宗清、式人の云、西行桜・をしほの後、花おりの狂言などに花を折る事。  
(反古裏の書(二))

享禄五年(天文元年 一五三二)

この頃 一 観世方狂言

路阿弥 音阿時之人也。名人なり。

うさき大夫 父子共ニうさき大夫と申也。子うさきハ、常德院

御時ノ者也。親ハ、東山殿様御代也。

犬若大夫 越前者也。被召上、京座ニ居候也。名人なり。

はる

三郎四郎 (アド)あとの名人。美濃権守兄也。

弥七 路阿か子也。

満五郎 吉野とちへら大夫座の者也。尊若養子也。

源右衛門 満五郎(甥)おいなり

一 今春方狂言

高安弥三郎

四郎次郎 堺藤二郎弟也。今春かたの者也。謡手也。

弥右衛門 満五郎弟子也。

一 宝生方狂言

生松弥三郎 名人なり。

中ノ上あをや与三郎

小法師大夫

又六

一 こんかう方狂言

刁菊七郎 とら菊三郎お井也。(甥)

くめの能阿弥 俗名不知。

(四座之役者目録)

天文五年(一五三六)

一月二日 其後如様体嘉例<sup>(の力)</sup>翁ハ定專也。ついにはらひ教了さんば

さ乗順以上。△脇の能せい<sup>(西王母)</sup>わうば大夫浄照坊、皇帝盛光寺、次女賢勝

以上。其次能実盛、<sup>大夫盛光寺</sup>脇<sup>祐勝</sup>、其後野々宮<sup>大夫了誓</sup>脇<sup>明誓</sup>、次女ぜかい<sup>(善界)</sup>

坊<sup>大夫了誓</sup>脇<sup>祐勝</sup>、其次高砂<sup>大夫浄照坊</sup>脇<sup>明誓</sup>、入半斗候。已上五番。狂言、唐

の皇すまい、若菜摘、大名萩花一見所、こ<sup>(さ)</sup>うや<sup>(座頭)</sup>□ん、<sup>(る)</sup>症等牛に

為乗所、おいはぎ仕損令口論さしちがふ□所。(証如上人日記)

一月二十五日 今きくハ笠のしゆうくの上手にて

雪ハうちふりつまるともなし (守武千句草案)

天文六年(一五三七)

七月十八日 猿楽長命大夫礼にきたり候条、於綱所酒のませ、大

夫ニ式百疋、脇ニ百疋、狂言大夫ニ百疋遣候、相伴上野也、

(証如)

天文十年(一五四一)

八月二十一日 今日御いんこん観世に猿楽させられ候云々……上

様よりからおり物御ふく観世に被下之云々のうなかはきやうけ

んの時如此伊勢守役候云々 (大館常興日記)

十二月二十八日 後日能在之、見物了、……金春座ニハ伊徳大ッ

、ミ・源七郎<sup>脇大ッ</sup>、ミ・弥左衛門<sup>小ッ</sup>、ミ・彦六<sup>大クラ</sup>・弥衛門<sup>同</sup>狂言、其外

大蔵兄弟三人・同五郎究竟之衆廿余人、金剛座ニハ大夫ヲ始而

其人数廿余人、美々敷見へ了、金春申事ニ依テ、金剛方へ五・

六人行キ畢、故ニ多人数也、 (多聞院日記)

天文十二年(一五四三)

二月十四日 いかはかり神もうれとおほすらん八幡の前ニ鳥いた

てけり (多聞院)

天文十三年(一五四四)

一月三日 木内弥二郎来、勧一盞、音曲候了、 (言継卿記)

一月十六日 ○松囃者已刻半時計始之<sup>松囃人数卅三人也</sup>……○松囃者

七番有之。鶴亀、玉依姫、羅生門、花形見、巴園、松虫、葛城天

狗。○坊主衆狂言者、土塔会、寢覚床、陶淵明、竹生島順礼、

三山、新三井寺也。○此後春一大夫<sup>松囃にも出也</sup>ニ能させ候、難波梅、

田村、船弁慶、杜若、老松<sup>後計乞能岩船計也</sup> (証如)



〔参考〕松バヤシ。殿原衆七バヤシ、其アヒニ坊主衆ヨリ六バヤシ。……松バヤシノ後、春日大夫能五番仕了。(私心記)

十月十二日 白光院餞に各召寄、田楽申付勸一盞、音曲候了、暮々より至夜半過柳原被來候、其外六七人申候処、各故障也、皆々召寄衆治部又四郎、河端<sup>庭田内</sup>左衛門尉、栗津<sup>藤中内</sup>修理亮、窪五郎次郎、其外助音大沢掃部、沢路修理進、同虎千代、同千代寿等也、木内弥二郎<sup>大つ、み</sup>持來、終夜狂言、種々無尽之興共、言語不可説也、此外白山衆各召出候了、白光院大鼓、松泉房小鼓、笛子等也、

(言繼)

十一月二十八日 能見了、……狂言在之、

(多聞院)

天文十四年(一五四五)

一月十三日 ○初猷参り候テ、御能ハジマリ候。兵庫楽屋へ被出候也。光・予各袴参候。松バヤシ七番、丹後セラレ候。<sup>(マ、)</sup>アセニ狂言一物ナドアリ。

(私心記)

天文十五年(一五四六)

六月九日 六町幼者共、生玉遷宮之能、予不見間、見セレ之度之由、昨日数度雖申之、炎暑以外之間、堅申留了。然今日者依雨中得涼気条、朝飯後俄申出処即各参勤之。△翁<sup>清水町</sup>寢覚北町愛寿清水舟弁慶南町皇帝北町羽衣<sup>新屋敷</sup>紅葉狩西町松虫北町芦荻清水西行桜南町岩船北町唐船<sup>新屋敷</sup>西王母<sup>西町後計無脇</sup>以上十二番 何も狂言無之。但鐘

鑄ト梅尾茶買ト二番計有之。

(証如)

天文十六年(一五四七)

一月十六日 於享有能。……△能之次第、式三番<sup>センサイフ</sup>六郎二郎、……△楽屋者亭之下也。狂言は亭上也。

(証如)

天文十七年(一五四八)

一月二日 △能者三番有之。翁<sup>福勝寺</sup>せんざいふ正教三ばさ乗順也。……狂言者職人共計也。坊主衆者不出。

(証如)

天文十八年(一五四九)

一月二日 △叟ハ福勝寺<sup>せんざいふ正教</sup>三ばさう<sup>祐賢</sup>……○頭祐者今日未刻過ニ來。以三種看对面之。此儀者旧冬廿八日ニ二日夕、狂言ニにも

(衍)

□近年者不参也。前に者雖祇候候、如此。

(証如)

天文十九年(一五五〇)

三月四日 於社頭法楽之手猿楽之能在之、太夫三人、十三・四才之物也、上手也、狂言九才之仁云々、言語道断也、

(多聞院)

三月二十七日 從今日元興寺於觀音堂之前、江州猿楽為御靈造營春円法師為取沙汰芸能在之、太夫二・三人在之、何も十四・五之若衆也、音声勝レ所作又勝タリ、狂言十一・二ノ物也、是又見事也、

(多聞院)

四月六日 於大乘院家御寺家始之間、為御翫各云トノ皆々祇候、……則於庭前彼手猿樂衆芸能在之、……能何レモ出来了、狂言殊更見事也、  
(多聞院)

天文二十年(一五五一)

一月二日 △翁頭祐せんざいふ尊宗三ばさう超勝寺……狸々脇無之。

狂言者申之。大夫浄照坊。

(証如)

天文二十一年(一五五二)

七月二十日 亥刻諸奉公衆風流、広橋へ見物、入破、くれは有之、種々一物狂言也、罷向見物了、  
(言繼)

天文二十二年(一五五三)

四月二日 自禁裏可急参之由有之、則午時参、尾州者師子舞其外

狂言於車寄仕候了、……柳枝に帶十筋歟被遣之、  
(言繼)

九月四日 △翁ニ寄風流有之<sup>奔走之由候テ有之也</sup>

(証如)

九月七日 今日も能有之。……能過後舞台へ春一大夫、六郎次郎、

木村大藏藤三、源衛門狂言、三谷<sup>太鼓打</sup>香四郎、二郎<sup>命王</sup>又五郎此

人数共召出、一声うたわせて折紙共遣之。大夫、六郎二郎、三

谷にハ式百足ヅ、其外ハ百足ヅ、遣也、  
(証如)

天文二十三年(一五五四)

一月二日 △翁頭祐せんざいふ正教さんばさ祐賢

(証如)

二月十六日 半井三位入道閑嘯軒所へ可来之由申候間、已下刻罷

向、庭前之梅可見之由有之、罷向人数正親町入道、広橋亜相、予、冷泉、広橋黄門、庭田、其外速水越中守、同安芸守、芝原<sup>江州青</sup>豊後守等也、……音曲有之、芝原狂言種種有之、亭主舞共至戌刻、  
(言繼)

天文二十四年(弘治元年 一五五五)

二月九日 未下刻参内、……黒戸之跡舞台被敷之、伊勢守内淵田三郎左衛門尉父子、河村民部、窪紀介、其外沢地藤次郎、窪新<sup>藤重相</sup>右衛門尉、同弟市右衛門、地下人兩人鼓大小、太鼓、狂言、以上十六人歟参、小うたい其外七番狂言等有之、御盃数献参了、  
(言繼)

弘治三年(一五五七)

二月九日 從來十二日於当寺之庭、女房狂言勧進有之云々、(言繼)

〔参考〕一月 駿州府中に越年、<sup>智恩寺末寺 勢林</sup>新光明寺之内周等庵、(言繼)

二月十二日 次於寺之庭女房狂言六番有之、勧進也、五六百人見

物有之、斎藤佐渡守来談、見物了、  
(言繼)

二月十三日 次一宮出羽守来談、女房狂言見物、同松井弥介来、

勧一盞了、今日者見物衆千四五百有之、  
(言繼)

二月十六日 龍寿庵、西林軒来談、昨日一昨日狂言に事外大群衆

云々、  
(言繼)

二月十九日 昨今又当寺に女房狂言以上六日有之云々、(言繼)

## 永祿二年（一五五九）

七月二十日 今夕從大覺寺殿武家御所へ風流御返有之云々、仍広  
橋垂相・予・内蔵頭等令同道、酉下刻参、妙覚寺見物了、亥刻  
帰宅了、築地杵躍・若衆躍二・西王母・唐船・高砂・入破三番・  
狂言二番等有之、頂灯呂七八十有之、  
（言繼）

十月十日 午時予・滋野井・内蔵頭等令同道、驢庵庭之菊為見物  
罷向、数寄之座敷茶屋菊南北十三間、東  
西七間云々等驚目者也、盃度々方々  
にて出、及大飲、音曲等有之、移刻、沢路新三郎召具、狂言有  
之、  
（言繼）

## 永祿四年（一五六一）

三月一日 一御能組之次第。……

式三番……千歳踏フミ 日吉弥三郎

老松……／狂言 餅酒／八島……／狂言 楽阿弥／熊野……／春栄

……／松風……／春日龍神……／……  
（三好亭御成記）

三月二日 御能之次第

式三番立……サンバサ 日吉弥三郎  
センサイフ 幸彦左衛門

（三好亭御成記）

## 永祿六年（一五六三）

五月十四日 於相国寺八幡

初日

翁 親 千歳ノ事カ  
スマイ 源右衛門甥  
サンバサ 日吉弥三郎……

弓八幡……／○狂言 ガンカリガネ／朝長……／○狂言 入間

川／定家……／○若菜／女郎花……／邯鄲……／大会……／朝  
顔  
（石橋勸進能之記異本）

五月（日不明） 二日

老松……／○狂言 麻生／安宅……／二人閑……／○狂言 忠  
度（薩摩守）／三井寺……／○狂言 鱸包丁／東岸居士……／  
錦木……／○狂言 鬚櫓／鶴……／吳服……  
（石橋）

五月（日不明） 三日

翁 親 スマイ 源甥  
サンバサ 弥三……

山姥……在所ノ者 弥三郎／○狂言 御田植／春永……供 弥三……

／○狂言 馬乗／松風……／○狂言（曲名脱）／木賊……／○

狂言 ホウシヤウ物語／三輪……／○狂言 伊文字／春日龍神

……／○狂言 首引／猩々……／○狂言 口真似／遊行柳……

／二人静……  
（石橋）

五月（日不明） 四日

翁 親 スマイ 次郎兵衛  
サンハサ 今春弥右衛門……

当麻……／○狂言 牛馬／実盛……／○狂言 ホウトク／卒都

婆小町……／○狂言 千鳥／船弁慶……／融……／○狂言 節

分／桜川……／松虫……／高砂……  
（石橋）

永祿七年（一五六四）

八月十九日 葉室へ日吉弥右衛門、<sup>狂言</sup>、明王又六朝喰ニ来、

(言繼)

八月二十日 松室中務大輔所に朝喰有之、予、葉室、社務三位、

亭主父子等相伴了、次、<sup>狂言</sup>日吉弥右衛門、<sup>笛吹</sup>同与八来、(言繼)

永祿十年(一五六七)

四月十一日 久河弥介来、対面、来十三日に狂言に師子舞之事、

於仰出者可舞申之由申之、内々可伺思儀之由申候了、(言繼)

五月七日 自烏丸使有之、正親町へ可来談之由有之、晚喰有之、

烏丸父子、予、亭主、法泉坊、<sup>狂言</sup>万左衛門等相伴也、暮々帰

宅、

(言繼)

永祿十一年(一五六八)

二月二十九日 観世太夫法楽

弓八幡 大黒／二人静 引敷聲／松虫 二九十八／卒都婆小

町 ふすまう／とをる あく坊／籠太鼓 牛なそ／西王母

聖護院殿御所望／高砂 さかもり

人数事<sup>次第</sup>／……／<sup>狂言</sup>安喜与八……／……<sup>狂言</sup>長命又三郎

／<sup>狂言</sup>津田与右衛門

(野坂文書)

<sup>宗節</sup>観世太夫下向アリ、……昔観世太夫下向ノ時ハ、舞舞台ニテ仕

ルトイヘドモ、見物所モナケレバ、今度ハ江ノ中ニテ舞台ヲハ

ラセ申シ付ク、神前ニテ九番仕ル、ソレ以後、棚守宿所ニ舞台

ヲハラセ、十一番仕ルナリ、ソノ時ノ見物ハ、<sup>道増</sup>聖護院殿、<sup>雅教</sup>飛鳥  
井殿、御両所見物ナリ、山口ニ逗留ノ安木与八<sup>喜</sup>狂言ス、

(房顯記)

永祿十二年(一五六九)

十一月二十四日

一松はやしの事……

一狂言乃事

一初にゑひす大黒のはやし物也<sup>是ハ狂言衆のもの</sup>……  
<sup>太鼓打候なり</sup>

一惣別の稽古に頭の打つ氣様分別して可打也縦ハ春と云狂言ハ

観世座に中比有三番さ一段の上手也殊に鈴とあし拍子合踏事

鈴をふる事妙也然るを神変なる由宗搥に不審申候へハ稽古積

りてくせに成て主ハ覚さる也太鼓頭もかやうに曲に成ほと稽

古可打 (観世又三郎宛似我与左衛門国広太鼓秘伝書)

永祿十三年(元龜元年 一五七〇)

四月一日 式三番<sup>小鼓彦右衛門</sup>

<sup>三倉</sup><sup>ワキ取</sup>  
<sup>大鼓大倉二介</sup>  
<sup>三河衆</sup>

<sup>笛春日同名者也</sup>  
<sup>ヨセ風流在之</sup>

(永祿十三年卯月朔日於殿中御一献御能次第)

元龜二年(一五七一)

二日十二日 門ノ能見物了、……一段見事出来了、<sup>狂言</sup>在之、

(多聞院)

二月十七日 成身院・妙徳院・妙音院・三蔵院・妙光院・常如院

申入一日遊覧、ヲカヤ岩千代・ホンヘキ与二郎雇了、狂言了、

(多聞院)

四月十三日 於極楽坊勧進之女舞狂言在之、人別一升ッ、

(多聞院)

五月十三日 日中飯ニ民部卿々・明禅々・専識々・陽教々請用、

トッハ神人同請了、

(多聞院)

元龜三年(一五七二)

閏一月二十二日 去十九日ヨリ西大寺奥院ニテ千部経在之、上尊

勧進ノ用久世舞狂言在之云々、

(多聞院)

天正三年(一五七五)

五月一日 昌叱心前同心にて賀茂の祭礼見物に罷出候、……當賀

茂の宮の辺にて京の代官村民、其外いさなひて乱舞有、大鼓村

(井貞勝)

井捨弟、小鼓天下一觀世彦左衛門子、大鼓賀茂の社人西藤甚十

郎、うたひ渋谷大夫、藤内、狂言満左衛門、与左衛門、

(玉里家久君上京日記)  
文庫本

天正四年(一五七六)

一月二十八日 御方御所御申沙汰諷、次能有之、猿樂衆上下京地

下人也、大夫三人有之、笛ウシホ出雲衆、小笛下京衆、——東寺衆、

(外脱カ)

小鼓シヤウ田与兵衛、其二三人、大鼓大トウ七郎五郎、シヤウ

田新四郎、其外二三人、大鼓宗二郎・朝日勝七村井長門守孫、十三才

長谷川五右衛門十七才、其外一人、狂言左衛門・与一ヌシ、ミ

(等カ)  
ツシホ也、

(言経卿記)

四月十九日 にわかにはやしかきにうたはさせらるゝ。さいしん。

ふち田。そのほかみなくまいる。ふえおしを。こつゝみしや

うた。大つゝみしやうたをとゝ。きやうけんよ一ひやうへおや

こ三つゝまいる。

(お湯殿)

十一月二十八日 後日能在之、北院先日死去諒闇也、雖然数年祭

礼無之、九年ノ間退転了、当年信長ヨリ当国筒井へ被任置、武

家退散旁々珍重之間、内府へ為聞執行之處、後日ノ能無之、諒

闇ノ子細ニハ不立入、略儀不可然事ナト被申テハ如何之間、可

執行之由宮符被申故、以集儀同心了、則頭屋ニテモ芸能如常在

之、諒闇之時ハ頭坊ニテモ狂言計ナル事先規連綿也、(多聞院)

天正五年(一五七七)

三月二十日 けふも御つしつく。六ちやうのまぢの人数かなへ殿

わきつく。しまいあり。ふえはた野と申物ふく。大(太)こまん五郎。

大つゝみこつゝみしやうたおとゝい。新さいけの物二ときやう

けんする。つしつきて。大(合)はんところの御まへにておとる。

(お湯殿)

天正六年(一五七八)

七月 正久(花押)ノ天正六年七月吉日 (天正狂言本・奥書)

天正七年（一五七九）

四月十一日 よるにわかにあやゝしんわうにふるまいにて。うた

いきやうけんありて。おもしろし／＼。

（お湯殿）

九月六日 にはかにうたいあり。よしおか。ほしか。くらゑん。

いなへなとうたう。ふえしんすけ。小つゝみはんゑもん。大つ

ゝみいや一。太こまん五郎。そう二郎子。きやうけんいすけ。

きくすけ。

（お湯殿）

九月十二日 よるみやの御かたよりてんかくの御ふたまいる。め

ゝすけとの。なかはしこやのやくしへ御まいり。くわんしゆ寺

所のいすけにきやうけんさせられて。そら色のいたの物たふ。

（お湯殿）

天正九年（一五八一）

三月二十八日 妙徳院・摩尼珠院・成身院請用、顯乗・良円・淨

教・孫七郎来、トツハ少三雇、一日遊覽了、奉行所ヨリ各へ伺、

兩人へ百疋ツ、来了、

（多聞院）

三月二十九日 小三へ自是廿疋遣之、

（多聞院）

八月二十日 上らふよりくこん。かき。みやの御かたよりかきの

枝まいる。けん中納言。くわんしゆ寺中納言よりたいの物。御

たる色／＼まいりて。みつし九郎二郎。よい一。ひやうへ。や

すな。にゑもん。そのほかまいりて。きやうけんはかりあり。

おさなきものもうたふ。ふえはこ笛なり。はてゝおとこたちの  
うたいあり。

（お湯殿）

九月三日 能 一番にしらヒケ、二番ニクマテはうくわん、三番

ニ大エイ、四番ニ八ノ木、五番ニゆや、六番ニ三わ、七番ニア

マ、八番ニしうケン。キャウケン 一番ニナへハツハチ、二番

ニ馬ノリ、三番ニツリキツネ。太夫、長命。ワキ、長三郎、与

二郎。ふへハ、ひこ七郎。太こ、喜右衛門。大ツ、ミ、イトク

三郎四郎。コトウ、善三郎。キャウケン太夫、又三郎。ツレ大

夫、祢キ。サ衆、五十人。

（上山城久世郡寺田庄法堅法度万ノ書物）

十月十五日 こよひ御日まちにて。おとこたちも御まいり。宮の

御かた。わかみやの御かた。おかの御所。とんけゑんとなる。

御めさましとて。上らふ。大すけとの。なかはし。いよとのよ

りかきの御ふたともまいる。にわかにきやうけんし候者とも七

人まいりてきやうけんする。そののちあすか井よりふしみとの

へおとりかけ候。又この御所へもあすか井よりのまいる。

（お湯殿）

天正十年（一五八二）

九月十一日 御手能有之、舞台ニテサセラレ候。今度参候猿楽共

ハ 金春大夫入道シテ吸蓮ト云、春日大夫親子三人、金剛又兵衛、在

言弥衛門、又若キ者一人、備中屋一噌笛、大ツミ山崎衆七大夫、京衆彦一郎、ドムノ与三入道小斂、太こ京衆杉浦、小ツミ山本雅楽。

(宇野主水日記)

十二月十九日 此申刻計、兵庫頭殿金吾へ御礼候、臈て御食参候、……薄暮までの御酒宴也、伊集院若狭守(忠次)狂言舞共被申候、就夫、御亭主よりとうふく彼人へ被遣候、種々御会尺也、

(上井覚兼日記)

天正十一年(一五八三)

三月二十八日 けふこうてうに。きのふの大夫とも御れいにまいりて。御はやし。きやうけんあり。

(お湯殿)

〔参考〕三月二十七日 とさま。ないくおとこたちはかり申さたにて。御のふ十はんあり。大夫けんさん入たう。十二郎たゆふもする。うきなはさゝや十二郎あい十二郎いとこのつるちよ。たけむらこさくわんたゆふする。

(お湯殿)

天正十二年(一五八四)

四月 三日ニ天下一ノきやうけん大夫おやモ被越候、五日西光院にて五はんきやうけんいたし候、八日、大手門口にて九はんきやうけんいたし、十日罷有候、其名をゑん藤四郎左衛門と申者ニ候、壇うこん・成田惣左衛門・織部両三人けいこ被申候、礼義ミのちやニいたし候、

(続常陸遺文)

天正十三年(一五八五)

二月二十七日 清水寺経へ四条・阿茶丸等同道参詣了、於坂小家、四条被振舞了、師子舞又狂言共両所ニ有之、見物了、四条来談了、誘引也、

(言経)

八月二十四日 此夜、土持殿へ中書御礼被成、我々御供申候也、……種々馳走共候、鳥鳴候までの御酒宴也、京より下候狂言大夫参、種々之義共申候也、

(上井覚兼日記)

天正十四年(一五八六)

一月十二日 けふ御はやし御てさたにてあり。たゆふしまやみなくきやうけんまでゑほしかみしもにてまいる。

(お湯殿)

二月四日 けふ女中小御所の梅み御申さたにて。御はやしあり。たゆふしふやそうらんまいる。……いなかのきやうけんとしてけんふつにまいり候めしたして、きやうけんさせらるゝ。おかしききやうけん也。はてゝのちおとこたちいつものことく御うたいあり。

(お湯殿)

二月七日 きやうけんともやすなにゑもん。三四郎にしろき物一まいつゝ上せういんにてたふ。かたしけなきよし申。(お湯殿)  
九月八日 於正法寺御能也、……翁与吉渡候、式三番、様子如常、  
東方朔洪屋父子にて仕候、脇宗次郎也、此能過候へハ、阿多掃部助、御椽より大夫と被申候間、参候、臈て、折紙被下候也、

千疋にて候、同 武庫様よりも被下候、本田刑部少輔被渡候也、

員数同前、狂言、石原治部右衛門尉仕候、春永、脇宗次郎、種

直与吉、斑女与吉、せかい坊与吉、太郎坊渋谷対馬丞、脇飯野

衆三郎兵衛尉也、自然居士、商人宗次郎、自然居士与吉、江口、

脇宗次郎、シチ対馬丞也、高砂、脇宗次郎、大夫与吉也、狂言

等、銘々不及記候、又東方朔過候て、狂言之内ニ御酒参候、：

漸酉刻頃ニ御能過候、狂言之間ニハ、内座へ御入被成、御湯

漬なと参候、終日之御慰共也、

天正十五年（一五八七）

六月八日 ソロリト云狂言仕参、物語申候。唐人ノマナヲ仕也。

（時慶卿記）

十月二十九日 禁中御能、某参勤。辰下尅ニ初。……御能ハ渋谷

父子仕。一番源氏供養ハ呉松仕也。呉松親狂言仕也。果後、如

常、御謡在之。

（時慶卿記）

天正十六年（一五八八）

七月三十日 巳の刻大和太納言殿へ、殿様御出で成され候也。午

の刻に閑白様御成り……御能初 ……シテ今春大夫、脇春藤六

右衛門尉、狂言大藏弥右衛門、笛安仲、小鼓幸五郎次郎、同春

藤与三、大鼓大倉二介、同樋口屋石見（太）索調也、大鼓今春又二也。

（天正記）

九月五日 辰の刻に大納言殿御請待に付て御城え御出で、……午

の刻より初の御能。翁春松、露弘小藤市、三番猿楽祢宜掃部助

……狂言今春弥右衛門、今春新六、祢宜掃部助、祢宜四郎、祢

宜亀鶴丸

（天正記）

九月十日 辰の刻に備前宰相殿へ御請待に付て、殿様御出で候。

……巳の刻に閑白様此所え御成り成され候。……御能初る……

翁（春日大夫、露弘長命神六、三番猿楽大倉弥太郎）笛牛尾彦六、頭取り幸五郎次郎、同大鼓樋口屋石見なり……

狂言今春弥右衛門、鴨松因幡也

（天正記）

天正十七年（一五八九）

八月二十七日 於一乘院殿延年在之、……猿楽四五人自大納言殿

被仰付、辰貝時分初日能八番在之、……狂言在之、八半時ニ能

終畢、

（蓮成院記録）

天正十八年（一五九〇）

六月二十日 一、大藏道知ニ南都にて対面之時（天十八六、月廿日）……

一、狂言ハ弥右衛門父をはめり。当弥右衛門よりも、猶心あざ

き狂言ときこえたり。

（音曲雑説聞書）

九月十九日 内々被仰通。公衆衆其外在京大名不残被召。御能有。

番組

難波……／狂言餅酒／実盛……／同入間川／三輪……／同アンタ

ヲ聲／定家……／同ハチタ、キ／張良……／同ナソ／熊野……



／同忠則／山姥……／同／自然居士……／魚セツケウ／弓八幡  
……

(毛利亭御成記)

御成翌日には、内々仰せらるゝ通り、公家衆其外、在京の大名衆、残なく仰請けられ御能有之。

式三番／難波……／狂言 餅酒／実盛……／狂言 くるま川／三輪……／狂言 あんだらむこ／定家……／狂言 はちたゝき／張良……／狂言 なぞ／湯谷……／狂言 たゞのり／山うば……／狂言 鬼こじき／自然居士……／狂言 せつけう／弓八幡

(毛利秀元記)

天正十九年(一五九一)

十二月八日 主上御別殿女御也、雪月七日充也、御能可有興行之

由、民部法印ニ御談合アリ、尤之由申ス、……所せハキニ依テ

御ハヤシノ分也、三番過テ能ハシマル、堀池左近大夫タリ、親

宗叱ワキラス、南都トツハト云祢宜ニ狂言師アリ、彼ヲヨヒノ

ホスヘキヨシ依 勅諚、任其旨乃剋参洛ス、 (古今聴観)

十二月九日 翌日ニ女御へ堀池其外乱舞之者とも御礼ニ参ス、

……此時左近ニとんす五巻、親ニ一束ニ巻物二たん、とつは二十帖

ニ巻物、いづれも従女御被遣、……乱舞三番、狂言五番、

女御下段、是ハ初狂言など見物の座ニテ、そのまゝ是ニ御入了、心得たる人候へハ、上とも被申へきを、いづれも若き衆の上、予妹トノ事ナレハ、不及

賞玩打 過ヌ、 (古今聴観)

この頃以前 一 狂言の調子の事。第一〔間〕の調子、一大事なり。前の中入の調子を、よく吟じて、相応して云出〔すべし〕。中比より、ちと調子を上げて語り、又、納めの時分に、元の調子に直し、留むべし。

(八帖花伝書二)

一 笛、ひしぎ候てより、次第を打出し候て、その能過ぐるまで、一番の間、舞台よりも楽屋よりも、一切出入せぬ物なり。楽屋へ舞台より出入、狂言の間にする物也。たゞし、大夫、中入を、作物の中へ入り、楽屋へ帰らぬ能多し。其時は、大夫の差替る面・衣装など、楽屋より謡のうちに持て、狂言大夫の来る事有。それは苦しからず。その外は、一切、座衆歩かぬもの也。

(八帖花伝書五)

一 狂言、教へる事。先づ、初め、初心なる時は、いかにもおかしく、人の笑ひ候やうに教へ候ものなり。さて、少々狂言をもし覚え、形のごとく仕候時、あまりおかしき事を、そゝと除き、狂言に身を入、面白き事を交ぜべし。其後、はや、年も行き候て、よき為手と申時は、いかにも物少なふ、喧しくなき様に、真にして、はづれ〔に〕おかしき事を入、どつと云やうにする事。是、上手の態也。稽古の次第、大方、かくのごとし。……一 狂言の間の事。中入の仕手〔の〕出立も考へ、手間の入には、長く語る物なり。手間の入り候はぬ大夫の持への間は、短く語

るもの也。その心掛け、肝用也。

(八帖花伝書八)

永禄・天正年間

月日不明 御遷宮御能次第

白鬚 笑御年貢／田村 今参／遊屋 花子／殺生石 栗焼／□

語／三輪……津□□右衛門

二日

融／東岸居士 むこ入／定家 落阿弥／大会 ともり／籠太

鼓 ふかくさ祭／錦木 酒もり／弓八幡 ふし松／(以下欠)

(野坂文書)

天正二十年(文禄元年 一五九二)

九月十八日・十九日 仙溪道倫つねにかたりしハ、予かおうち道

春ハ、山城国玉水のあたり平尾と云里にすまれし時、所の氏神

和久の森の大明神といへるかたつ田舎なれと大社あり、予かた

めにも氏神にて、ことにかくとうなり、折節たいはにをよひし

をなけき、うわふきのため、くわんしん狂言を宮の前はいてん

にて二日せられし時、大蔵道知・同名平蔵・幸月軒など、あんな

るいなれは見廻にまいられ、らくあゝのはやしをこひうけて、

平蔵・月軒・長命吉右衛門はやされしと、度々かたりし。其時

(鳴子)なるこの狂言のはやし、月軒一てう鼓にてうたれし時、云合

たされしゆへ、今に幸の家の秘事に致すと聞侍りし。二日の狂

言組、ふるきほんこの中に有へしとて、かわこの内をたつねられしかと、ミへさりしかハ、口つからかたられしを聞、かき置し事なれば、あとさきのちかいあるへけれど、なきにハしかしと書付る物ならし。

文禄元年(ママ) 九月十八日ハ毎年和久の森の大明神の御神事なり。此日より翌日まで二日、翁式三番、両日なからありしとなり。翁ハ長命二郎太夫、拍子ハ道知・月軒の弟子祢宜衆なり。

狂言ハ次第くわしくおほえす。初日の脇狂言ハ すへひろかり、

二日の脇狂言ハ 松やに、此外ハつねにする狂言ともにて、め

つらしきことハなかりしといわれし。一日ニ一番つゝ、さかも

りの有狂言ありて、しゆんの舞ありしと聞しなり。番数ハ一日

に十二三番とおほえしと申されし。

狂言の役者ハ、道春・道倫・長命徳右エ門・同甚蔵・同弥

七・ほうそのゝ千介・祢宜とつは・同宗助・同九郎右エ門・同

つのかミ、其外も祢宜わかき衆いてしと聞し。

(明暦堺七堂狂言芝居)

十月十九日 於 院御所御能

弓八幡 大閣秀吉…… 間 鷺三之丞／萩花 大蔵弥右衛門 長命甚六 鷺三之丞

芭蕉 大閣秀吉…… 間 長命甚六／栗焼 鷺三之丞 大蔵弥右衛門

皇帝 大閣秀吉…… 塗師 長命甚六 鷺三之丞 大蔵龜蔵

源氏供養 前田加賀守利家……

／呂蓮 民部卿法印 大藏弥右衛門

千手 織田三郎……

／茶壺 大藏龜藏 長命甚六  
新莊駿河守

野宮 大納言家康……間

大藏弥右衛門 長命甚六  
清水 大藏弥右衛門

羽衣 丹波中納言秀勝……

／鬼瓦 鷲三之丞 大藏弥右衛門

山姥 織田常真……

間 鷲三之丞

三輪 大閤秀吉

(雲上散樂会宴(番組存疑))

文祿二年(一五九三)

一月二十三日 きやうけん

やへもん(花押)／さき(花押)／甚六(花押)

此内一人つゝ

右如此くみあわせまいる、可相詰旨、かたく被仰出候也、

(富岡文書)

八月十三日 肥前国名護屋ニ而秀吉公御代ノ御能

東方朔 今春八郎……間 大藏弥右衛門

右近 親世大夫……間 七良四良

張良 宝生大夫……間 伊右衛門

羽衣 金剛大夫……

弓八幡 金春大夫……間 弥右衛門

御所望ニ而 田植 大藏弥右衛門

(文祿慶長御能組)

九月十五日 大乘院御日待トテ寺僧衆十人計被召、芸能在之云々、

以外風吹了、一夜能在之、以上十二番、狂言如常、大夫土岐見  
咲斎、三番、禅良、野田祢宜以下、 (多聞院)

十月五日 禁中ニて秀吉公御興行之御能

初日

翁 暮松新九郎山城国八幡神職

三番三 木下与右工門  
千歳 大藏弥右工門虎政

弓八幡 秀吉公……間 祝丹波

／狂言 腹不立 民部卿法印  
新莊駿河守 長命甚六

芭蕉 御 ……間 祝丹波

／今参 弥右工門 甚六  
龜藏

皇帝 御 ……

／酢姜 甚六 弥右工門

源氏供養 羽柴筑前守……

千寿 岐阜中納言……

野々宮 江戸中納言……間 大藏弥右工門

羽衣 丹波中納言……

山姥 織田大府信雄御法名常真……間 鷲三之丞

三輪 御

(文祿慶長御能組)

文祿貳年十月五日於 禁中御能之事

一、ヲキな くれ松 一、せんさいふ 甚六 一、さんはさう  
(延重)

木下与右衛門尉 ……

弓八幡／……一、アイ 岩井弥三郎……／一、弥三郎あひ□

□を兼てきとくニ候、但八幡ト名付候事ニ少不審あり、面之  
時可尋、一、当月今日と云候事、珍重、一、放生川ノ因

縁無相違、一、御詫言ヲ申ニより、するく／＼と御帰洛と云候  
事、祝義作意尤也、

一、枕狂 民部卿法印 (前田玄以) あと 新庄駿河 (直頼) ツクリヒケ、弥右衛門 (大蔵)  
尉

一、芭蕉 ……／あひ 弥三郎 ……

一、弥三郎あひ待を多引、芭蕉を物に多たとへ折る事いへり、  
是ハ弓八幡ノあひニハ少をとり候か、

一、皇帝 ……／あいしらひ 弥右衛門尉

一、源氏供養 ……

一、腹たてすの正直坊を弥右衛門尉・甚六・亀蔵 (大蔵)ス、

一、千手重衛 ……

一、野宮 ……／あい 弥右衛門尉子

一、羽衣 ……

一、山姥 ……

一、三輪 ……

此後二番あるへきを、時雨故とめられし、弥三郎あいあ  
た／＼と殊に出来候、社と拝殿との事をわけ候、分社の子細  
にいへり、可尋、又女体といへりいか／＼、(禁中猿楽御覧記)

十月七日 二日目

翁 壽松新九郎 三番三 木下与右エ門  
千歳 大蔵弥右エ門

老松御 ……間 祝丹波 / 狂言 ひくさた民部卿法印 大蔵弥右エ門  
同 亀蔵虎清

定家御 ……間 大蔵弥右エ門

鶴飼 会津侍従 ……間 鷺三之丞 / 狂言 耳引 大閣秀吉公 加賀之  
家康公 前田殿

遊行柳 丹波少将 ……間 長命甚六 / 狂言 鞍馬参 大蔵亀蔵 長命甚六

大会御 ……間 鷺三之丞

楊貴妃 備前宰相 ……間 大蔵亀蔵

東岸居士 丹波中納言 ……間 鷺三之丞 (文禄慶長御能組)  
翁 くれ松 せんさいふ 長谷川 右兵衛見事也、さんはさう 弥右衛

門尉 ……

老松 ……／あい 弥三郎 あるしなしとてと云事、  
故実を不知事、尤也、

定家 ……／あい 弥三郎

鶴飼 ……／あい 弥太郎

大閣・家康・筑前三人 (前田利家) つめの狂言出はの狂言也、

遊行柳 ……／あい 五兵衛

弥右衛門尉・甚六 福わたしの狂言せり、残多キ体也、

大会 ……／あい 弥右衛門尉・弥三郎・甚六

楊貴妃 ……

東岸居士 …… (禁中猿楽御覧記)

十月十一日 三日目

翁 今春大夫 三番三 木下与右エ門  
千歳 大蔵弥右エ門 ……

呉服御……間 大蔵弥右エ門 / 狂言 御年貢大蔵弥右エ門 長命甚六  
大蔵龜藏  
田村御……間 祝丹波 / 狂言 ゆふぜん民部卿法印 新庄駿河守  
大蔵龜藏

松風御……間 鷺三之丞

江口羽柴筑前守……間 祝丹波

雲林院江戸大納言……間 鷺三之丞

杜若御……

紅葉狩織田常真……間 長命甚六

通小町 岐阜中納言……

金札御……間 大蔵弥右エ門

(文禄慶長御能組)

〔参考〕十月五日 民部法印狂言三日 三番其外狂言なし

十月七日 去五日於 禁庭御能組之次第／初日 ……／枕物狂の

狂言民法

(駒井日記)

文禄三年(一五九四)

四月十六日 一聚楽に而御能有之……

一御能役者猿楽共に被下物之覚 春日 同三郎四郎 猪右衛門

春藤 弥右衛門 ふくわう 五郎次郎 平蔵 右兵衛 甚六樋口

進藤 清七 上之分已上拾式人五貫宛○甚六弥右エ門子小鷺 松

齋京衆 りうは りうこん ゆあさ ほしか ゆうくわ 小四

郎 弥市 又五郎 与五郎 喜兵衛 弥蔵ひ口の○七条衆 庄又右衛門

六兵衛 采女 八兵衛 藤八 中之分已上拾九人三貫宛 右之

者共に合百拾七貫被下 此外樋口春日など御小袖銀子など被下  
右之外金剛宝生鷺又次郎などハ御扶持人に付而不被下也

(駒井日記)

五月十日 御本丸御能

弓八幡……／萩大名 甚六郎／箴……／源氏供養……／通円

弥右衛門 仁助／吉野……／道成寺 今春八郎……あひ弥右衛門 龜藏／三輪

……／乱猩々……

(文禄年間御能組)

七月二十三日 江戸亜相へ罷向、昨日礼ヲ申入了、狂言ヲ御覽ト

テ能有之、浅野弾正忠殿御内矢嶋子(長吉)十才、大夫也、地諷衆上下

京衆、囃衆同前也、夕食已後有之、老松フクハリ、勘左衛門尉、舟弁慶フンサウ、

・定家等見物、早帰、暮過テ也、未四五番有之云々、

(言経)

九月十八日 大坂西丸御能組之次第

翁 暮松新九郎／大蔵龜藏／長命甚六／一番呉服……あい祝弥

三郎／狂言 末広がり 大蔵龜藏／二番田村……／三番定家……

……／四番皇帝……／五番野守……／狂言 栗焼 祝弥三郎／六

番羽衣……／七番鶴……／狂言 花入 大蔵弥右エ門／八番源

氏供養……／九番山姥……／祝言…… (文禄年間御能組)

文禄四年(一五九五)

二月七日 あさいな 狂言有

(薪能番組)

二月十日 かたわの狂言有 (薪能)

二月十一日 狂言一番有 (薪能)

二月十三日 狂言三番有 (薪能)

四月九日 於名護屋御城御祝儀／御能組之次第

翁 今春八郎／千歳振 大蔵六兵衛／三番三 大蔵亀蔵／……

一番高砂……あひ 大蔵弥右衛門／狂言 今参大名大蔵亀蔵／二

番田村……あひ 大蔵亀蔵／狂言 鼻取相撲大蔵弥右衛門／三番

松風……あひ 長命甚六／狂言 釣狐祝弥三郎／あど 長命甚

六／四番邯鄲……／狂言 宗論大蔵弥右衛門／五番道成寺……

狂言あひ 大蔵弥右衛門／六番弓八幡……／七番三輪……あひ

長命甚六／八番金札…… (文禄年間御能組)

六月十三日 江戸黄門へ罷向、ヤ、コヲトリ・狂言等有之、見物

了、 (言経)

文禄五年(慶長元年 一五九六)

二月十三日 狂言一番有 甚六・さき大夫忒人 (薪能)

十一月二十八日 狂言一番有 甚六 弥右エ門 さき大夫 両三

人 (春日若宮祭礼後日能番組)

慶長二年(一五九七)

二月九日 狂言あさいな 孫右衛門 多むま 弥太郎 (薪能)

二月十日 ぢしやくきやうけん 弥右衛門・弥太郎兩人(薪能)

二月十一日 あく太郎狂言 弥右衛門・弥太郎兩人 (薪能)

二月十二日 狂言一番 弥右衛門・弥太郎兩人 法花衆 念仏衆

船欠 (薪能)

十一月二十八日 狂言一番 甚六 弥太郎 さき大夫 両三人に

て (春日若宮祭礼後日能番組)

慶長三年(一五九八)

二月九日 狂言はらたてすのしやうちき房 (薪能)

二月十日 あさいなのきやうけん有 甚六・弥太郎兩人(薪能)

二月十一日 きやうけん三番有 (薪能)

二月十二日 あほし折のきやうけん 甚六・弥太郎・鷺大夫両三

人也 (薪能)

五月七日 とつはまいり候て。くろとの御にはにてひとりきやう

けんしまいらせ候。八てう殿。みやの御かたも御けんふつにな

らせおはします。とつはくわんしゆ寺大なこんつれ候てまいら

る。 (お湯殿)

五月二十四日 いつものことくろとにて御せんほうあり。けふ

もやつこおとりあり。いろ／＼のきやうけんもまいらす。

(お湯殿)

六月三日 ならより上すのきやうけんし十人はかりまいりて。く

ろ戸の御庭にてきやうけんあり。八てう殿。大かく寺との。竹

の内殿御けんふつになる。……二千疋きやうけんしにくたさるゝ。  
(お湯殿)

慶長四年(一五九九)

二月九日 狂言 弥太郎・甚六・さき両三人 (薪能)

二月十日 衆論之きやうけん 弥太郎・甚六兩人 (薪能)

二月十二日 甚六 弥太郎 さき (この行術カ)

ゑほし折 弥太郎・甚六・さき両三人

山だち 弥太郎・さき兩人 (薪能)

閏三月二十八日 とへはと申きやうけんし。しゅこうのこにはに  
(つカ)

て二三はん申。三百疋下さるゝ。 (お湯殿)

八月十四日 大門様能へ従未明参候、……扱能者已貝前ヨリ初之、  
(言カ)  
……狂絃、 (多聞院)

十月一日 入洛ニ而觀世黒雪勸進能於京都聚樂本丸觀世左近大夫忠親

初日

翁 黒雪……千歳 面箱 日吉与次郎  
三番三 日吉座ノ者——孫兵衛 (天正慶長元和御能組)

十月二日 二日目

翁 ……千歳 弥三郎  
三番三 伊右衛門 (天正慶長元和御能組)

十月三日 三日目

翁 ……千歳 弥三郎  
三番三 日吉座ノ者 (天正慶長元和御能組)

十一月五日 くろとにていつものことく御せんほうあり。しん宮

の御かた。たけの内殿なる。ならの抄きともまいりて。きやう  
(マ、)  
けんしまいらする。なかはしにてあり。 (お湯殿)

十一月七日 へつてんにて。なかはしへならします。御はやしあ  
り。大ゆふしふやおとゝひ三人まいる。かうえもまいる。十一  
はんはやしまいらする。きやうのきやうけんし。ならのきやう  
けんしたちあいてしまいらせ候。 (お湯殿)

院御弘ニ有酒・ハウハン。凡若衆達十人。并ニ躍子亦来。二員  
也。一人者号一蔵。一人者号二蔵。皆兄弟也。座之衆九員来也。  
ハウハン了テ。根若之吸物有之。其以後台物廿三。其外肴数両。  
不足数之。十人之少年各々雖有芸。笛無之故。謡計ニテ不鼓。  
躍子三番躍也。其外狂言度々。 (鹿苑日録)

慶長五年(一六〇〇)

二月十二日 あさいなのきやうけん有……甚六・弥太郎兩人

(薪能)

二月十四日 さとうのきやうけん有 弥太郎・さき大夫・甚六舎  
弟両三人也。 (薪能)

三月五日 夕かたくろとのふたいにて。ならのきやうけんしま  
りて。きやうけんしまいらする。 (お湯殿)

四月二十五日 ならのきやうけんしまいる。色色きやうけんとも  
つくしまいらせ候。御所御所御けんふつあり。 (お湯殿)

四月二十六日 めのうへと申きやうけんししゆりやう申入るゝ。  
 いづれもちよきよ也。  
 (お湯殿)

十一月二十八日 狂言 弥右エ門 あん太良 弥七  
 (春日若宮祭礼後日能番組)

この年以前 ヤスキカ云ク、能はテ、其能ヨク出来候ハ、狂云  
 おそく出ルコト、第一狂云ノ習と申され候。此ぎりハ、能之仕  
 舞能々人ニかんシさせンか事也。はやく出候へは、しよ人先々  
 狂云へ心付ル故ニ、能々かんみ無之。おそく出候時ハ、先々狂  
 云ヲみちかく仕候て置候由申候。当代ハ、ならいニかまはず、  
 なかくおかしくさへ候へは名人ノ由、昔シニハかわり候由、一  
 噺物語ニテ候。又其能不出きナル時ハ、狂云急出候者也。それ  
 ハ、ふてきなる能候、<sup>(之カ)</sup>はやくわすれさせンか事也。丹後、幽斎  
 様御前ニテ、一噺御物語被申候。  
 (一噺流笛秘伝書)

一、鈴段。ソリカヘリノ所ニテヒシキ吹。ソリカヘリトハ、顔  
 ヲ三度ナツルナカノ度、ヒシキ吹カケタル、吉。能ミ吹覚候へ  
 ハ跡ヲ崎へ色ミニ吹。別ノ吹やうハナシ。鈴段、カ、リサマヲ  
 ヒシキテカ、ルハ、ソリカヘリニハヒシキ不吹候。乍去、ソリ  
 カヘリノ所ニヒシキ不吹候へハ、一円舞手カナキトテ悪敷候由  
 候。ヤスキト申狂言ヨリノ御尋ニテ候。  
 (狂言者ニヨク御尋候由候)  
 (矢野一字聞書)

慶長六年(一六〇一)

二月七日 高砂 今春大夫 …… あい甚六 (新能)

二月八日 百万 金春大夫 …… あい弥右衛門

きやうけん一番 甚六・弥太郎・甚六舎弟 以上三人ニテ (新能)

二月十一日 多ひら 宝生若大夫 ワキさき大この子 (夫)

あさいな 甚六 絵馬ハさき

大明狂言 さき・甚六・弥右エ門・甚助 (新能)

二月十二日 狂言 さき大夫・弥右衛門兩人ニテ (新能)

三月十一日 撰州大坂御城ニ而内府家康様 秀頼公ヲ御ふるまひ

之御能

翁 金春八郎 三番三 大藏弥太良虎清  
 千歳 長命伊右衛門

高砂 金春八郎 …… 間 長命甚六 / 目近米はね弥太郎 甚六 伊右衛門

経政 観世子 …… 間 弥太良 / 鼻取相撲甚六 伊右衛門 弥太良

松風 金春八郎 …… 間 弥太郎

船弁慶 金剛三郎 …… 間 伊右衛門 / 柿山伏甚六 弥太良

千寿 金春八郎 …… / 三人片輪弥太郎 伊右衛門 甚六

天鼓 観世大夫 …… 間 弥太郎 / 鍋八抱甚六 伊右衛門 弥太良

祝言 宝生大夫 (文禄慶長御能組)

三月十二日 二日目 秀頼公ヨリ 家康様ヲ御振舞ノ御能



翁観世大夫 三番三 長命伊右衛門  
千歳 大蔵弥太良

白髭同 ……間 弥太郎 / れんかぬす人伊右衛門 甚六  
弥太良

忠則 金春八郎 ……間 甚六

道成寺 金春八郎 ……間 弥太良 伊右衛門

安宅 観世大夫 ……同 甚六 弥太良

世我意 金春八郎 ……間 伊右衛門

イトクリ 金春七郎 ……間 伊右衛門

柏崎 金春八郎 ……

玉葛 金剛大夫 ……(間 春藤仁介)

感陽宮 観世大夫 ……間 伊右衛門

項羽 金春八郎 ……間 弥太良

祝言 観世大夫 (文禄慶長御能組(古之御能組にて補))

十一月二十八日 なには 宝生大夫 わきさき大夫子

(春日若宮祭礼後日能番組)

慶長七年(一六〇二)

二月十日 狂言 弥太郎・弥七・甚六・同舎弟 四人にて

二月十一日 弓八幡 宝生若大夫 ワキさき子息

ぬゑ 宝生若大夫 ワキさき子息 (新能)

二月十四日 老松 宝生若大夫 ワキさき子息

狂言 甚六・弥夫郎・さき (新能)

五月二日 家康様ノ被仰付金春大夫 禁中ニテ御能仕候

翁 金春八郎 三番三 大蔵弥太郎  
千歳 長命甚六 弥三兵衛

アリノ風流 長命伊右衛門

高砂同 ……間 弥太郎 / 昆布柿 弥太良 甚六  
伊右衛門

田村 同イニ七郎 ……(間 甚六) / 鼻取相撲 伊右衛門 弥太良  
甚六

松風 同イニ少進 ……間 弥七 / 法師母 甚六 弥太良

道成寺同 ……間 弥太郎 / 腰祈 弥太郎 伊右衛門  
甚六

自然居士同 ……間 甚六 / 長光 甚六 弥太良  
伊右衛門

一角仙人同 ……間 伊右衛門 / 俵藤太 伊右衛門 甚六 各々

融 同イニ少進 ……間 仁介 / 腹不立 仁介 弥七  
甚兵衛

鵜飼同 ……間 弥七 / 鞍馬参 甚兵衛 弥七

金札 同イニ七郎 …… (文禄慶長御能組(古之御能組にて補))

五月三日 同後朝

翁 金春大夫 三番三 長命伊右衛門  
千歳 大蔵弥太良

賀茂同 ……間 伊右衛門 / 鍋八抱 伊右衛門 甚六  
弥太良

八嶋同 ……間 甚六 / 音曲 甚六 弥太良  
伊右衛門

江口同 ……間 弥太良 / 磁石 弥太郎 甚六  
伊右衛門

谷行同 …… / 首引 伊右衛門 甚六 各々

三輪同 ……間 甚六 / 宗論 甚六 弥太良  
伊右衛門

鐘馗同……間 伊右衛門

三井寺同イニ少進……間 弥太良 甚六

山姥同 ……間 甚六

女郎花同イニ少進 ……間 伊右衛門

老松同イニ少進 ……間 伊右衛門 甚六 甚兵衛

追加

天正十年（一五八二）

十一月十六日 兵庫頭殿於御宿御談合也、……御談合過候て、御

酒宴御寄合也、……石原（治部衛門尉某）なと申者狂言共仕候て、御酒宴也、

十一月二十一日 此日武庫・中書、忠棟宿へ入御被成也、終日御

酒宴也、……石原治部右衛門尉狂言共申候、

天正十一年（一五八三）

十月二十六日 此朝、又太郎殿より忠棟・拙者可参之由候間参候、

……石原なと狂言共仕候也、

十一月十一日 此日も小川へ逗留申候、……石原方へ狂言・物語

なとさへ候て、慰候也、

天正十二年（一五八四）

一月十三日 出仕如常、……京都より下候奥之山左近将監鼓なと

仕候、又狂言舞なと仕、種々御酒宴也、

十月三日 忠棟各々へ寄合被成、……終日乱舞共也、奥之山・松

尾鼓也、笛簫田甚丞也、石原治部右衛門尉狂言舞共申候、

十月四日 此晚、合志殿陣所へ武庫様御礼被成候、……奥之山・

石原なと狂言舞共候、

十二月三日 松田左近兵衛尉来候て、狂言舞なと仕、酒宴共也、

天正十三年（一五八五）

九月十六日 此日、有馬殿へ御寄合被成、……終日御酒宴共也、

……石原治部右衛門尉狂言なと仕候也、（以上、上井寛兼日記）

慶長三年（一五九八）

一月二日 一翁者勝願寺三ハサ西宗寺子 相生……

狂言御年貢堂ノ文誓 堂ノ極楽寺 アカイ称名寺 定家……

狂言堂ノ覚応寺 堂ノ正観 堂ノ文誓 当摩切……

慶長五年（一六〇〇）

一月二日 一翁大夫性応寺三ハサ性応寺子了尊 脇能当麻……張

良…… 弓八幡切

一狂言烏帽子折堂ノ玄誓 同極楽寺 金津地藏正歎 極楽寺 性応寺子

慶長六年（一六〇一）

一月二日 一翁大夫性応寺三ハサ性応寺子了尊 脇能東方朔……三輪

…… 相生切……

一狂言若菜堂ノ正歎 同極楽寺 越前ノ正善 了・淨賀等也

鞍馬福同願宗寺 同極楽寺

（以上、慶長日記）